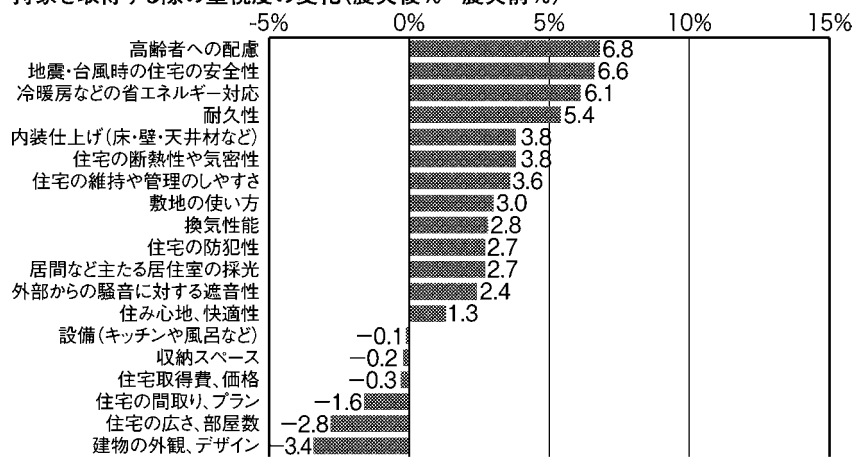


求められる災害への強さ

持家を取得する際の重視度の変化(震災後%-震災前%)



資料:住環境研究所「東日本大震災による住意識の変化」調査



大和ハウス工業の省エネ住宅「スマ・エコオリジナル」に搭載されるエリールパワー製蓄電池

蓄電池

住宅メーカー各社は蓄電池付き住宅の投入を前倒して消費者のニーズに応えている。

積水ハウスは太陽光発電、燃料電池、鉛蓄電池の3つを備えた自立型省エネ住宅「グリーンファースト ハイブリッド」を8月に発売した。日常的には夜間に蓄電池や燃料電池の電力を使って環境対応を強化する。

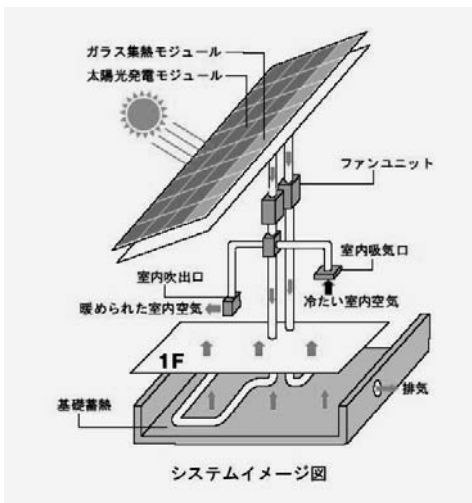
意識変化

震災以降、消費者の意識はどう変わったのか。住環境研究所(東京都千代田区)が7月に実施した住意識調査(一般1088件、住宅購入検討者981件)によれば、住宅取得時の重視ポイント

電を減らし、一般的な住宅に比べ光熱費を年間26万円削減する。非常時には太陽電池、蓄電池、燃料電池などからの電力供給に自動で切り替わる。採用した鉛蓄電池は容量が8.96kWhと大きく、満充電の状態を冷蔵庫、テレビ、照明を約17時間使用できるという。発売を目標にしていたが、消費者の反応は良く、すでに9月末時点で150棟以上の契約交渉が進んでいるという。11月からは同商品にHEMSも標準化する方針で、さらに環境対応を強化する。

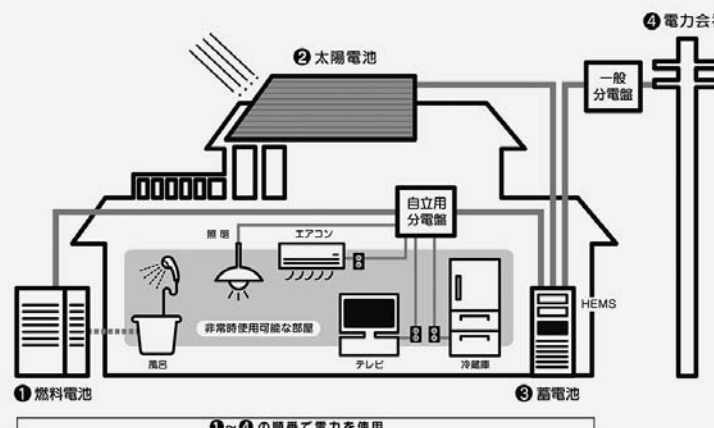


積水ハウスの自立型省エネ住宅「グリーンファースト ハイブリッド」の外観と解説図



ミサワホームもエリールパワー製蓄電池を採用し、これを万一の災害に備えた水や食料の備蓄システムとして活用することと提案していく。2012年春にはデンソーの大容量蓄電池(容量5.0kWh)を搭載した住宅も発売する予定だ。

このほかパナホームは10月に発売した省エネ住宅「カサート・デコ」に、年内にも蓄電池パッケージを追加する予定だ。同住宅は太陽光発電とエコキュート、年間を通じて温度変化が少ない地熱を利用した空調システムなどさまざまな省エネ技術を搭載したもので、光熱費は省エネ効果と売電で年間10万円の黒字になる。このほか積水化学工業住宅カンパニーや三井ホームなども12年の蓄電池付き住宅発売に向けて性能検証を急いでいる。



「地震・台風時の安全性」を挙げた人は震災前から6%上昇し8%に、「冷暖房などの省エネルギー」も同6%上昇の81%となった。一方、住宅のデザイン性や価格、間取りを挙げる人は減少した。震災後は住宅の機能を重視する傾向が顕著に表れている。

太陽光発電採用者の蓄電池への関心は「かなり関心」が34%、「ある程度は関心」が57%で、合計で90%を超す高い確率に上がった。非採用者でも80%以上が蓄電池に興味を持っている。災害時や停電時の非常用電源として蓄電池に期待するほか、昼間の太陽光発電や夜間電力を蓄電することで電気料金を安くできることも評価につながっている。

こうした傾向と同時に浮かび上がるのが、家族の絆を重視する消費者の姿勢だ。住宅取得時の重視ポイントに、高齢者への配慮」を挙げた人は約7%増加して70%になった。また遠距離にいる親族を呼び寄せたりだけ二世帯同居やできるだけでなくに住むことも考えるようになった人は震災前から7%増の33%に増加。特に若い世代ほどそうした意向が顕著だ。実際、住宅メーカーの販売担当者からは、震災以降一世帯住宅の受注が急増しているという声も聞か

住宅産業

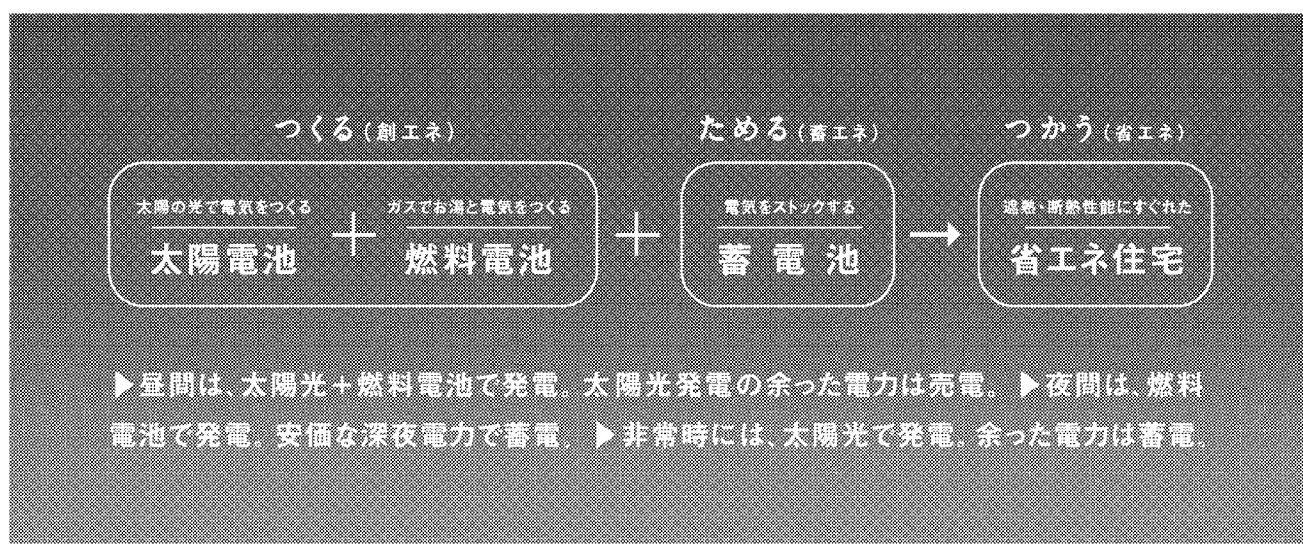


SEKISUI HOUSE

日本の家を、未来の手本に。

for the next stage

人に、街に、環境に。積水ハウス



日々の快適と、環境の未来と、暮らしのエネルギーの問題に、先進技術のすべてを注いで答えます。日常は、節電と快適な暮らしを両立し、非常時にも、自立した生活を可能にする家づくり。積水ハウスから、新しい提案です。エネルギーに「3つの備え」のある家。燃料電池、太陽電池、蓄電池の、3つの電池を備えた住宅、「グリーンファースト ハイブリッド」を、

世界に先駆けて実現しました。家庭内で暮らしのエネルギーを、効率よく「つくる、ためる、つかう」ための理想的なシステムを構築。最高レベルの「快適性、経済性、環境配慮」を約束する「グリーンファースト」が、いま、未来へ向けて進化します。

Green First HYBRID

3つの電池を備えた「グリーンファースト ハイブリッド」。世界に先駆けて、積水ハウスから。

グリーンファースト

検索